

街ぐるみ、地域ぐるみで
支えられています

長尾 嘉明さん

株式会社メディサン 代表取締役



歴代の研修員を撮って研修室に飾っています。こうして見ていると、一人ひとりの思い出がよみがえります

Interview
この人にきく
Yoshiakira

地方研修ならではの良さ

私は、もともと技術職ではないのです。就職先で機材修理の技術が必要だったから、懸命に勉強して習得しただけで…。そのとき上司だった教授の勧めで、昭和55年にガーナへ修理調査の専門家としてJICAから派遣されたことがきっかけで、現在に至っています。研修はコードの抜き方からはじまり、機械の使い方や組み立てなど「修理」「メンテナンス」の考え方や技能の習得が主な内容です。

研修員には、日本滞在中につらい思いをさせないように心がけます。受入当初の試行錯誤を経て、宗教と食生活への配慮が特に大切だとわかりました。研修中は会社の上にある宿泊施設で生活するので、宗教や民族の違いから生じる研修員同士の誤解や争いが生まれないように、生活面は手取り足取り教えるようにしています。食事は自炊です。自分たちでスーパーへ買い物に行き調理して「今日は何を食べようかな」と、楽しんでいるようです。

地方で実施する長期研修ならではの利点はあると思います。研修員も、山や畑があるここでの生活は安心するようです。研修員が道に迷っていると親切に連れてきてくれる方、タオルなどの備品を提供してくれる企業や、果物も食べなさいとリンゴをわけてくれるリンゴ園の方もいます。地元のお祭りや交流会に参加したり、市役所、警察、ライオンズクラブ、地元企業などたくさんの方々から街ぐるみ、地域ぐるみで研修員を応援し支えてくださいます。本当にありがたいと思います。「日本に来て良かった」という言葉を聞くと嬉しいですよ。お世話している気持ちが伝わるのでしょうか。

カンボジアとの縁

ボランティアでカンボジアへの支援も続けています。研修監理員が難民出身の方だったことが縁で、カンボジアとの関わりが生まれました。カンボジアと日本はともに仏教を信じる国なので、根本的にわかるものがありますね。プノンペンにライオンズクラブ設立に協力したり、難民を収容した地域に小学校を建設し、音楽や体育の授業で使う文房具や楽器、サッカーボールなどの器材を贈っています。6年前からはカンボジア日本センターで毎年実施されている日本語スピーチコンテストで審査員を務めたり、優勝・準優勝者の日本招へいに関わっています。一所懸命日本語を勉強して、アンコール・ワットで日本語ガイドをしたお金で大学に行く子もいるのですよ。会社を引退したら、カンボジアの面倒を見ようと考えているところです。

平成十九年の年頭にあたり、謹んで新年の御祝詞を申し上げます。当センターはお陰様をもちまして三月二十五日に設立三十周年を迎えます。これまで、永い間賜りました皆様の御指導と御支援に深く感謝申し上げます。今後とも引き続き国際協力、特に人造り協力のお手伝いを通じ、皆様方のお役に立てるよう一層の努力をして参りたいと存じます。


 財団法人
日本国際協力センター
理事長
諏訪 龍

ながお・よしあきら 昭和14年福島県生まれ。県立福島商業高等学校卒業後、福島県立医科大学で実験助手・機材整備、医療器械メーカーで医科器械据付修理に携わった後、福島県郡山市に株式会社メディサンを設立。郡山ライオンズクラブ幹事。保健医療機材修理分野でのJICA研修受入機関として、昭和55年から現在まで受け入れた研修員は68カ国延べ400人に及ぶ。JICEは研修監理業務で関わりがある。

私の提言 途上国と留学生と“インフラ”

早大ゼミと日本の経験

“経済発展とインフラ”をテーマにした早大大学院での講座を通じて、多くの留学生が日本のインフラの成功例や失敗例から自国の問題への新しい取り組み方を考え、将来は政策担当者としてそれを生かしてほしいと思います。

阿部 義章（早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授）



地下鉄工事現場見学中のゼミ生

はじめに

途上国の発展のためには、日本の対外援助が重要との認識は、皆が持っています。しかしながらその援助額は近年少しずつ小さくなってきています。援助の質向上の必要性が問われるところですが、その一環として日本が途上国からの留学生に効果的に学んでいただくことも大切で、彼らが、大学院レベルでの新しい公共政策的な分析道具を身につけ、我が国の江戸時代頃より繋がる経済経験のなかで、何時のどんなものが自国の参考になるのかも説明出来る能力を持つて帰国し、自国の発展の政策に少しでも寄与してくればと思っています。

途上国とわたし

私は学部時代以来、途上国開発に関わり続けてきました。日本で開発論を勉強し、アメリカの大学院で国際経済学と開発論を修め、世界銀行に入りました。昭和42年の入行時は、日本が世銀からの借入国から卒業した次の年でした。その頃は、日本はまだ経済復興の時代で、おそらく私は途上国から来たと思われる

ていたのでしょう。世界銀行ではちょうどプロジェクトの選択や分析方法に、マイクロ経済分析手法を導入している時で、当時としては新しいOR手法等を利用したのもその頃でした。以来、国のマクロ経済分析と貸し出しプログラムの要素であるプロジェクトとの整合性を個別に考える仕事をアフリカ、中近東・欧州、南アジア、ラテンアメリカと地域を動きながら導入し、誠に貴重な経験をしました。

今年度は13人の院生が私の講座に所属し、内3人が博士課程、9人が修士課程、1人が科目等履修生です。国籍から見ると日本人が4人、あとは留学生（内JICAの長期研修員は2人で、これまでに7人の長期研修員が私のゼミに在籍しました）です。講座のテーマは、途上国のインフラサービスの多くは政府によって供与されていて、もしそれが効率的になされるのなら、国内貯蓄率の増加に寄与できると

いうものです。世界銀行在職中は、途上国の政策担当者と共に効果的な政策と思われるものを練り上げ、実践し、現在は大学での講座を通じて途上国の将来の政策担当者の育成に努めております。

インフラ

私の「経済発展とインフラ」のゼミや授業では過去の日本のインフラの成功例や失敗例が多々教材になっています。学生たちはそれらの資料を検討したり現場を見学したりします。特に留学生たちに自国の問題への考え方や取り組み方にまた新しい見方ができるきっかけを体得してほしいのです。数年前にはあの巨大な黒部ダムを訪ね、我が国の戦後の経済復興にいかにかに電力が必要であったか、繊維輸出を



講義中の筆者

可能にするための黒部ダムでの発電の役割がいかに重要であったかを議論しました。またアクアラインの場合は、交通量が当初推定していた値より著しく低い現状を学び、一体国民がこの工事の必要性を認識し議論したのだからかと考えたりしました。最近では現在進行中の明治通りの下を走る地下鉄13号線の工事現場にて大都市の地下で工事をするこの難儀さを見学しました。

説明は別にして、日本固有の伝統や、政策決定のやり方が要因になって、あるものはより良い方向に、あるものは悪い方向に影響している傾向は留学生にとっては日本国を学ぶ材料にもなり、自国の政策選択に参考になる材料にもなるわけで、実に興味深そうな様子です。結果として無駄な公共事業をやめるには、その事業の資料がくまなく公開されていなければ、から始まり、インフラの運営の基準は、言うところのグローバルイゼーションとは関係がないものの、世界の基準というものがあることを再確認したり、インフラサービスの料金制度にあっては相矛盾している効率性と平等性を追求しなければならぬ必然性を、日本の経験から学んでいます。

おわりに

私のゼミが始まって以来、30余人になる留学生のほとんどが自国に帰り、自国の政策にそのテーマを反映させているものと期待しつつ、私自身は現役で居る限り引き続きそれを伝播していきます。



あべ・よしあき
昭和14年大阪生まれ。昭和37年慶應義塾大学経済学部卒業。昭和42年米国コーネル大学経済学部研究科博士課程修了後、世界銀行入行。平成8年世界銀行退職。国際協力事業団客員専門員、名古屋大学大学院国際開発研究科客員講師を経て、平成9年より現職。経済学博士。専攻は経済開発とインフラ、ODA。



人のつながり

テーマエッセイ

「人のつながりって何だろう?」

「私たちが」という垣根

チヨイ・ユンシム(社団法人韓国国際交流推進協会 研修支援部 チームマネージャー)

「マン・ヨンハセ(マン・ユンハ)」

社団法人韓国国際交流推進協会(INEPA)は、韓国でも国際協力に専門的な支援が必要だという判断により、韓国のODA事業実施機関である韓国国際協力団(KOICA)から担当官をJICEに派遣し、JICEとJICE間の協力関係と業務状況を把握し、平成10年(1998年)に外交部認可の非営利社団法人として設立されました。

このように、JICEの広報紙に文章を寄せる機会をいただいたこと、感謝を申し上げ、皆様に韓国の文化について話したいと思います。またこういった文化的背景から、INEPAスタッフと研修生との関係はどのようになっているか申し上げます。

「謝りの言葉を期待しないでください」

研修初めのオリエンテーションでは、韓国での生活に必要な生活常識に関する簡単な説明を用意しています。その中で、マナーについて文章で「韓国では道で人がぶつかるべき時、謝られることを期待しないでください」というものがあります。このことを説明するとき、私はいつも苦労します。

外国の文化からすると不思議に思われることなので説明に含めていますが、どうして韓国の人々は謝ることをしないのか、という質問に明確な回答をすることができません。私自身も道で人とぶつければ、何も謝りの言葉を言わず通り

過ぎますが、理由を説明することができません。これはまさにアメリカ人が英文法について、韓国人や日本人より説明できないことがある、ということと同じと言えるでしょう。

これに関連して、一番顕著な韓国人の人間関係について話そうと思います。韓国人は、「私たちが」という意識が強く、知り合いには非常に親切ですが、知らない人には、非常に無愛想です。例えば、知り合いに親切にする百万種類の方法を知っているとすると、知らない人には無愛想にしか思えない方法をたまたま一つしか知らない、と言えるでしょう。

韓国人は、知らない人に自分から先に声を掛けるとか、近づくとか、笑うことは苦手です。しかし、内心ではできたら手伝ってほしくて、喜びと一緒に分かち合いたく、一緒に泣いてほしいという気持ちで一杯です。時には無愛想に見え

時にはあか抜けない対応をしますが、しかし、短いあいさつをしても、一言の中に真心が込められていて、心から湧き出る行動をするので、相手は胸を打たれます。

研修生たちとの関係でも同じことが言えます。しかし、業務の性格上、十分に知り合えるまで待つことはできないので、研修開始前からJICEまでできないまま



オリエンテーションで、バスの乗り方について説明を受ける研修生

社団法人韓国国際交流推進協会 International Exchange Promotion Association(INEPA) 韓国政府や韓国国際協力団(KOICA)の支援を目的として、平成10年(1998年)2月23日に設立された非営利民間法人(社団法人)。事業内容は、現在外交通商省およびKOICA研修生招請事業支援業務、韓国版青年海外協力隊派遣支援業務、保険業務、各種国際会議および行事運営。JICEは平成17年度からINEPAとの交流を開始し、調査団派遣などを通して相互関係を深めています(6ページ関係記事参照)。



韓国の伝統文化に触れてもらうことも研修の一環

な方法で、彼らを知るための努力をします。各担当者たちは研修カリキュラム内容の周知、研修生の推薦および選定、航空券発券など研修の初期業務から評価およびフォローアップの全般的な事業を管理しているため、研修が韓国で始まる前からメール、電話、ファックスなどを利用して研修生たちと意思の疎通を図ります。

ただ、「親切に」対応することだけでも業務を遂行するには充分かもしれませんが、皆さんもおわかりのとおり、どんなことでも人間関係という調味料が入らなければ結果は半分程度のものでしかないのではないのでしょうか?

「研修生と一緒に過ごした、忘れることができないハネムーン」

広報誌「NOW & Ever」(JICE News Letter)を定期的に発送して同窓会ホームページに研修の状況を掲載

するなど、研修生の帰国後のフォローアップをしています。が、より深いフォローアップは個人的な次元で成し得るのではないかと思えます。

ひとまず、「私たち」の中に入ってきた人なら、絶対簡単には関係を切らないことが韓国人の性格です。一日が過ぎても、一年が過ぎても、その期間に関係なくオープンな心で待ち、また会うのです。

私たちのチーム員の中に、去年の春に結婚した「ジョン・テヨル」さんがいます。モルジブへハネムーンに行く前に、ずっと連絡を取り合ってきた帰国研修生と約束をしまし

た。そしてハネムーン最後の日にリゾートでゆっくり一日をおくるのでなく、友人が準備してくれた特別な日程のために、早目に荷物を整理して出発し、本心に忘れることができない思い出を作りました。大言壮語して友人の連れて行ったその場所は無人島といつてもいい島だったそうです。一方には麻薬収容所があり、水も出ず、やかにある少量の水を少しずつ振りかけて体の塩気だけ拭いたそうです。ロマンチックなハネムーンのフィナーレを期待した新郎と新婦は慌てたと思えますが、たぶん一生忘れることができない思い出だったと思えます。そして、一日中自分の時間を割いて車や小さな船を準備してくれた友人に私たちは皆感嘆し、感謝しました。

「私たちが」という垣根

私は日本のテレビドラマの大ファンで、なかでも、「リトルの涙」というドラマで次のようなせりふを聞きました。『誰であれ、君の言葉を聞くこととする意志がある人がいたら、いくら君がわかりにくい言葉を使っても聞き分けることができるよ。』

研修を受けに来る方々の中には、経済的に、そして政治的に難しい状況に置かれた国の人々がかなり多くいます。どんなに表現しにくい状況で、どんなに言語と文化が違うても、またどんなに大変な状況でも、私たちが話を聞くこととする意志があれば、お互いに理解することができ、変化はたちまち現れるものだと思います。関係は維持されるしかなく、より良くなるしかない。私たちは幸せになるしかないということでしょう。

いつのまにか「私たちが」という垣根に入ってきた世界の多くの人々と一緒に変化することができ、幸せを伝えるために私は今日も世界の友達と会います。

お読みいただき感謝いたします。マン・ヨンハセ(Man Yon-ha)それではまた。

(原文 韓国語)

チヨイ・ユンシム

韓国生まれ。嶺南大学商経学部卒業後、民間企業勤務を経て平成13年に社団法人韓国国際交流推進協会入団、現在に至る。



テーマエッセイ「人のつながり」って何だろう?とはさまざまな分野で活躍する方に、一つのテーマやキーワードから「人のつながり」を語っていただく企画です。JICEが目指す人と人とのつながりをあらためて考えるきっかけにしています。



人と人をつないで支えます国際協力



JICEには、多彩な専門分野をもつスタッフが、人と人をつなぐ架け橋として活躍しています。個性豊かな横顔を紹介していきます。

言葉に携わる仕事だからこそ、日本語の表現を大切にしています

研修監理員(トルコ語)
菊池 玲子さん

日本人とトルコ人とは、かなり国民性が違います。真面目で几帳面な日本人に対して、トルコ人は大胆でおおらか。旅行で初めて訪れたトルコで人々の温かい心にふれ、喜怒哀楽をすべて受け止めて返してくれるように感じたのが、トルコとの関わりの始まりでした。平成2年からトルコ語のために留学、卒業後半年ほど現地でJICAのプロジェクトに関わった後、帰国して平成8年から研修監理員として仕事をしています。

研修員に日本人の生活や国民性を伝えることも、私たち研修監理員の重要な仕事だと考えています。日本人に対し「なぜ、そのような考え方をするのか?」という疑問に直面した時、日本で見て感じた体験が、その疑問・問題解決の糸口になるはずです。



素敵、きれいな表現があるのに、すべて「かわいい」で済ませる風潮は、ちょっと…。もっと言葉を大切にしたいです

「国民性の違いを感じた」ということは、前進でもあります。

日本の良い面も悪い面も、研修員自身の目で見て感じてもらえるように接しています。私にとつての研修監理業務の魅力は、その手助けができるということにあるかもしれません。

JICE以外に他機関でもトルコ語通訳・翻訳に携わっています。言葉に携わるプロとして、母語である日本語をきちんと表現するように心掛けています。

トルコと日本の国民性や言語の違いを認識したうえで、それぞれの違いに気を配り、与えられた機会を通して日本とトルコ、互いの国民性を理解しあう手助けをしたいと思います。

JICE NEWS

小泉八雲が伝える日本の心を世界に発信 松江市での青少年スピーチコンテストを後援

昨年9月24日、「第40回ヘルンをたたえる青少年スピーチコンテスト」が小泉八雲に縁のある島根県松江市で開催され、JICEも後援団体として関わりました。諏訪理事長は表彰式の挨拶で、八雲の著作「稲村の火」がカンボジアの中学校の教科書に掲載されていることを例に挙げ、「明治時代に英語教師としてわが国の人造りを支援し、今なお、作品を通じ日本の文化や心を世界に伝える八雲と、日本での滞在と仕事を支えた夫人の節子さんは、私たちJICEの先駆けともいえる存在であり、国際協力の大先輩にあたる」と紹介しました。

第一歩を踏み出した相互連携 諏訪理事長が韓国国際交流推進協会を訪問

昨年10月18日から21日まで、諏訪理事長が韓国国際交流推進協会(INEPA)を訪問しました。これは、昨年4月のINEPA理事長のJICE来訪に続いて、両機関のさらなる協力関係強化を目的に実施されたものです。会談では、今年度中にINEPAから若手職員をインターンとして受け入れる方向で、人材交流について具体的な調整を進めることを確認しました。



シンKOICA総裁(中央)、JICA理事(右)と会談する諏訪理事長(左)

INFORMATION

沖縄支所 移転のお知らせ

沖縄支所は、昨年12月4日をもって事務所を移転しました。

【移転先】

〒901-2552
沖縄県浦添市前田1143-1
独立行政法人国際協力機構
沖縄国際センター内
TEL:098-874-0056 ~ 8 FAX:098-874-0049

JICE は平成 19 年 3 月 25 日に設立 30 周年を迎えます

皆さまの声をお聞かせください

広報紙『JICE』に対するご意見、ご感想、ご質問、今後取り上げてほしいテーマや人物などを、下記アドレスへメールでお寄せください。
広報紙『JICE』編集事務局 e-mail:kohoshi-jice@jice.org



古紙配合率100%再生紙を使用しています

平成19年1月20日発行 発行所：財団法人日本国際協力センター(ジャイス)
〒160-0023 東京都新宿区西新宿六丁目10番1号 日土地西新宿ビル20・21階 TEL.03-5322-2500 FAX.03-5322-2520 http://sv2.jice.org



私たちJICEは、個人情報保護法を遵守し、徹底した個人情報の管理をいたします。